

隠線を消去されたる受金のISO図 騙し絵のよう

大谷ゆかり

「受金」は受け金具、「ISO図」はアイソメ図のこととて、立体を斜めから見た図のこと。自動販売機の各部の図面を描く仕事に取材した作のようである。職場の歌、職業の歌が少なくなっている昨今、こうした作が多くあってほしいと思っている。それぞれのPCと向かい合っている職場では、なかなか歌はつくりにくいと思うが。

連れだつて親子の鹿は川に來ぬ鮎釣る吾は何と見ゆるや
小笠原政雄

東京に住んでいる私などには、映画の中の一シーンのような、うらやましい光景である。野生動物には野生動物なりの好奇心があるから、親子（子鹿は何頭いるのだろうか？）は興味深げにこちらを見ているのだ。下句、直感的な思いを、凝った表現にせず、ストレートに表現して成功した。

カウンター越しに前髪撫でてくる指よりわたしに届く漣
駒田晶子

前髪を触られながら、身体的なものだけではなく、心的な波動が伝わってくる、というのである。場所はどこだろう。カウンターの店だろうか。触ってくるのはただだろう。読者の物語、小説的な興味を挑発する。

真夏日の汗を滂沱と流しおり悲喜の器としての人体
佐々木寛子

とまらないほどの汗をかいて、自身の肉体を意識した

短歌の現在

No.416 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

とする上句の心理の動きが自然である。ぶつきらばうな下句がそれによって生きた。

死してなお解かれぬ軍命この兵も永く土中に気をつ
けをして
加古陽

一連中に鈴木貫太郎邸の歌があるので、作中の「兵」は二二六事件に関係があるか。あるいは敗戦時の何かに関係している兵なのかもしれないが、よく分からない。ただ、軍の絶対服従の命令のもとに死んでいった兵は多かつたので、読者がこの兵を特定できなくてもいいのかもしれない。

鋭角に朝日射し込みくきくきと蟻が五階の壁のぼりゆく
谷ちえみ

五階の壁とあるのは、マンションの壁だろうか。オフイスビルとかデパートとかは思い浮かべにくい。学校とか病院も、ここではあまりぴんと来ない感じだ。問題は「くきくき」とである。一匹ではふさわしくない。かといって何十匹もの集団も思いうかべにくい。上二句が魅力的なだけに、ここが読めないのが残念。

周り中すべてが夏でめくつてもめくつてもまだ終わらない本
吉野美野里

猛暑の日中、時間が静止したような感じを、第二句以下、うまく表現している。めくれられないのではない。めくつてもめくつてもめくり終わらないのである。

濃い影を選んで歩くこの国の未来が勝手に決められる日は
武田ますみ